湖月鈔

しゐの本

7152

椎本　宇治二

細 巻名も歌とも見えて 河 哥よりしん詞にもなし
椎がもとむなしき床になりにけり 師 此巻ハ橋姫
の次年也 薫宰相中将廿三年めなり 細 薫廿二
歳の春より次のとし廿三歳の夏までの事也 花鳥
異本あらく 不用之 孟同

きこしめすのとうの程に参り
のゝあそびをきゝて
細 宮歌などよくしまへ
給ふ
宇治のわたりれは中宿り
孟 宮歌などして参詣又ハ
宇治などのわたりをゆかし
くおぼしての給ふ 細 薫教
の御幸なるを中宿り
よきあふ所なりしいふ事 海
のゆゑあるそ云同参詣ハ
ることハ中宿をとせしく
うらめしといふ 細 喜撰か
哥に下は今あり喜撰
定家の哥とひとつこれ
もはかなしとそよく詠
さかれたるなるべし
花 文義七年七月宇治
幸の時叡慮の歌におく
詞人の山路の月をまつけ
ましく里の名へくさかう
きの他定家孟抄宇治ハ都
のたつみをしかぞすむ世をう
ぢ山と人ハいふなりそて宇

二月の廿日の程に兵部卿の宮はつせにま
うで給。古き御願なりけれど。おぼしも
たゝで年ごろになりにけるを宇治
のわたりの御中やどりのゆかしさに
おほくはもよほされ給へるなるべし。（三此詞草子地也）
うらめしといふ人もありける里
の名のなべてむつましうおぼさるゝ（古今の詞侍るなるべし）
ゆゑもはかなしや。上達部いとあまたつかうま
つり給。殿上人などはさらにもいはず
世にのこる人すくなうつかうまつれり。六
条院よりつたはりて右の大殿（夕霧之）しり給（今の平等院之）
所は川よりをちにいとひろくおもしろく

治定たる方にてひろすおくしくそのふもとよりなすさくみうく孟
一ゐておもしろましう　細 非是故よ文のるつし
子地の書なり
六条院よりつたはりて右のおほいとのしりたまへる所は　細 源より夕霧の伝領ある
所々との平等院なるべし　花 河原左大臣融公の別業宇
治郷にあり。陽成天皇しばらくこの所におはしましけり。宇治院と号す
天皇を朱雀院と申しを領しまゐる所也。寛平御門宇多まで御遊猟あり
李部王記にみえたり。そのゝち六条左大臣雅信公の所領となりしを長徳四年十月比御
堂関白此院を買とりて同五年によく宇治の別業にせられし。永承七年に寺となされ法華三昧を
つとむ。宇治関白頼通公の代になりて
修せられ平等院と名付給ふ。治暦三年に行幸ありきいまハ藤氏の長者これ
所く。六条左大臣より御堂関白に伝はりしを六条院とハ書
なし給へく
川よりをちに　孟 あなたへ寺をさし或ハあすこにいふんとも用之　師伝からと
をちとハ河のむかひく
おもしろく　細 夕霧 白文
の御下向の御迎よまいり
を待らんとて

てあるに。御まうけせさせ給へり。おとゞも　（夕霧より白文に饗応あるべし）
かへさの御むかへにまうで給ふべくおぼしたるを
俄なる御物忌の。おもくつゝしみ給ふべく　（夕霧ハ宇治へ不行地忌）
申したなれば。えまいらぬよしのかしこまり
まうし給へり。宮。なますさまじとおぼ

まうでなまほしと
孟 夕霧の御迎よまいり
ゐつて物すれバうたがひなく
中〳〵心やすくて
細 夕霧のまいり〳〵白ぞ
すさましと思召し業の
まゐりまうでたる心やすく
て夕霧の気色うかゞふべきを
憚くしくおもひつるをよき
かく〳〵やもしくとハおもひ
御くとは　三 夕霧之紅梅
君也や。夕霧なとハ白文
の風流なきこゝろをいふ
中まの御人よ見えまほし
まゝあるなり。
ことゞしの気よませ
孟 白文を夕霧をいふ
めてわかやけをさしを
こそハ崇敬すうりと葉
子給く

したるに。宰相の中将。今日の御むかへにまいり　（細 宰相）
あひ給へるに。中〳〵心やすくて。　（白霧の心也）
かのわたりのけしきもつたへよらんと御　（三八宇治の姫君達の事也）
心ゆきぬ。おとゞをばうちとけて見え　（夕霧）
にくゝこと〳〵しきものにおもひきこえ給へ
り。御子のきんだち。右大弁。侍従の宰相。権中　（細 夕霧の御子達）
将。頭少将。蔵人の兵衛のすけなどさぶらひ給　（孟 これ夕霧の子共也）
ふ。みかど。后も心ことに思ひきこえ給へ
えまつる宮なれば。大かたの御おぼえもいと　（白の御事）
限なく。まいて六条院の御方さまハ
つぎ〳〵の人も。みなわたくしの君に心
よせつかうまつり給。所につけたる御しつら　（彼夕霧より御まうけのこと也）

らひるどおかしうきこゆれとくごとくろく。
源碁前ニ注
まさこのくんどもとかなどそり物くらくらくろく
よるとらひくくし給ふこゑはいてすゝひ給ひぬ
はあんとさよるやうしく御はされくこて　八宮乃
御方をゆかしく思ひはべれどもみかくし
よやもらくそらむの御こゝろをふかゝれと。
しらせとてまそて。夕つきぞ御琴もちもと
かしてあそび給ふいのちか世をすてすれにさら
ところにこの音もとをそてふやうしてぞと
のく音すこまさらうてして。彼ひざの
のこゑかもくらくさしまさるわとそれた。
とひ風に吹きわひて箏給ふむかし　八宮のこと
のこゝみかりしそしれく。少箏をひしれり

細　八宮弟ときおぼすてこ
花宮御院ハ平等院を
うれへし河むかひひへひ
このこゑを何からこきく
なれハ船そさしまゐら
せしらるゝハ今の橋寺の
ほとりとそうこし
ひ風よ　師　細の箏を吹と

絶とてしおかしう
うきよそり　袖をそうすくそもあつくはきゝくる風を追風といふなるへし
細　箏の音ぞおかしけり　師　八宮の箏かうり

細　菖の箏
らしのねくの
の音を殺仕のこゑに似
しうりよふり柳すに通
そなあへ
義よひきうしくありよけ
なや　箏も八宮の様こ
ちまふ躰し。むかし後結
うどしまひきすの久
しくありくるとこ

しくもすきとおりておもしろくきこゆる
孟　源氏の御箏之
人音の六条院の御箏の音嘆しといひとれ
うけなあいもりつきころ給ふにてそ吹給
しうこれえすこのかりてとこくしくれ
孟　御箏之一様の心也
けのそひきるはらしの北々の御ぞくしれ
箏の音のこそみつるれるど給ひてらた
それ義によひきしくなりよりやかやう
のあそひるとともでさふくあるてそ色
しきよけりとし月のこさくるとよ思わくう
孟　大君中君のこと
ぎんらしてそうひあけまゐるどもの給つい
で三兆姫君こちの御もの給わかうしく。

うら山ずしこゝろよひそかにて
めでたしハ　孟やまずしハ不止也　八云
のかたく
宰相の君え　細薫也
八云のたんえ
法文なとのこと
ひるふとそり師薫え
適心の方ちそちかまそ
まいられしらぬ給君
そらよさしてんずれ
わくどもえ
つゞくとうすめ給
細ちやうの極楽をとし
給をとこてまつで一入流
まくもまうりね　つし
数攄あれハ　細　攄咲攄
の山乃攄花ちる攄あ
まそきく攄あり

うら山ずしこゝろにひきこめてハ。やまずず（細 薫之 八云のんの 孟 薫）
とじめしかりしつゞきをしら。宰相のきミ
の（と書きてえらきをのゝ）かたよりはいうらちさゆらうみえまかりし
けるかな。さるしもとよりまかりもかりませぞ
いまやうのわかきうちくんどへいかでうとる（当世の人へいうてひ）
どかりかられてつきぐるしとるすめ給。さこし（こまいけんくさく　公宮治）
ろハ昔の秋もいとかりしとこらつれこゝろ（の里をいうて　細 白文か）
やつきまいる籍ののやどりハこたへのまさ（ゆかなりはるときかくかりしまう）
きよのとようゆぬめうこうらしてあらぞ
えらんとどを文ハかみをもちあぐとうきを（孟 白文え）
をはられらるのしまよ。数攄あれハ今ひ
らけそはるらしかくれかくえんましてきらしに。

河ぞひ柳の　細　河海云
佑貴之竒　いふ遥河
そひ柳のゆけへかきふ
しられども根さえ臣
もと萍葉　日本紀第十
又顯宗天皇御竒
いふ遥河そひ柳のゆき
そなひとかきうらそ
のいうせにかずれ
河ぞひ柳とよめる細
ふうべきなり
山風よ　細　弟の嘉して
でふうれどかのつそこ
そつゝられどかゝり
御波羅を薫と推量
してよこまつり絶河声
へ風よつきそ山へられ
孫隔をうかゝるとの心
くぞそ隔てミゆるをちの
白波といふこゝろなり

河ぞひ柳のゆききよしるびくかげを
ど。まろかるすしにかうしこ給どすうらひか
ちぬんも。いとめづらしくて捨ぐるしと（白文をさうしてなし）
おぼさる。宰相ぞかりうりをもぐさに。（孟 薫ハ八文ヘまいるやうえ）
うの文よまうでゞやとかげをしおあうさ
のんめ給まぎそ。ひとり儒ぬ給らん舟
まうりの程をと。うらうよやとさひや
もしひ給程よ。うしりかぞあり（孟 八云へまうくの段かる）
山風よ霞ふきとくこゑハあれど隔（八云）
てミゆるをちのしら波。さらよいとれの
しうさまつり。こやかわきあくうひと（細 白文かれをそうのまえ）
そうまへぞ。いとかうしくかげひらくこの河

とちらの 細 まうすこ
よりんかつゝて給之
のんとくらく 細 花多許可
説 花村上御記ニ應和元
年閏三月十一日藤宴ニ
舟楽奏ニ醍醐酔楽ニ弁
人四人之く今案醍醐酔
楽八右楽之船楽ヨモ
例ニ任せあり、や 盃ん
まいらく善表紙之海
よハうもよらくとあり不用
うちひらくとあるさ本
之云く醍醐楽ニ示
之云何水系一越調 何意
の道遥ふれハ様をたよ
るあり気下略 私兄者表
紙よ志くかひて 細盃の
内説可用之

くりハ我さんとて
白 遠近の竹乃波へて川見る我吹るよ
へ宇治の竹風、中ねハおうて結、あそバよ 細 蕭之 舟なと之
うつりれさりきんぎりうそひてさうし
やまと絵猶りんをのらくあそびて、ゐつは
のぞきてうつらうよ、つくりかたうつうろ橋
のんだへうじ、どうりつさよいとかりうら紅 奥人
おりうゑうれども、わでかして舟うらあり
盃 八文の匹不の餘之
絵、こいおもしろ海こうよ、山里ひきうおもしろ
紙 都びとさくらよきつらしあふそ
屏風なさのとしまつよつしとそそそて、二所
おうはさんくひを、さうこうつらしてりさきえ
盃 苦まうの楽黒を
らひ、いとつうきかしまくり、いふし へのに

わかまのたとしぞうわ 細 八文の変
しまうて廊ありし所 八文のまく下 細よ宮くそ又さまはつしふとハ由へいりくえる術く
おもろ屏風 何普通の網代とそもうくろ屏風之、肩ハ山荘ならどの古めうしき 細 役よハ
定まりよく漆骨よ片面を張て細組みして閉合せうろ物く邊屏風とえく又ひおしろの
屏風とえく物おう几車のひおじえハ竹を日よ白くさらししつくくさんら物へ
一あ川てうのえよ 細 今よ
と八楽人ハ呂鉄まそ双調
あうを一越調のまとても
のよしうろく楽人の細
ま其の舟ちでめうりく之
ゐ細ありちでめんとく
めうとじとろ羽うや板宮よ
てうえひまうく死楽人全
呂寺之 呂ハ双調ニ竹ハ平
調也、双調の楽ニハ多く
ハ一越調をまうーて黄相
く一越調もさゑつら又
まさうろア之師を舟と
呂あり、葉中将と楽人
どめよとうてみろの葉の
舟ますせあり面白され
よおひろうや

るさ、いとみるさ引物だとわでとまうつと
そうちつゆはおしそで、つきくのさ出結
盃 八文之り 葉の後引のそく引結之
く一越でうのこころよ、楽人あそび結、おとし
おもしろうとえ
の文乃琴をさ、しろつのでくかゝんぐひ
まこれど、結之のとしとでころよもいれども
細 面白真おろ座と引まつ之師塚
おりくうさあそをを結りうくるれぬけるや
しくうとうろく
あうん、いと物像く面白しと、いりきさんぐ
細 御饗應く
さひまさうり所よつゝしうろあるじいとお
りうえあそでしそまさひやつもし猶まん
いさ酒そんりうめくいるしうこみ人おま

さんまうめくもしらぬ人へおもひみだれ四位の
こゝろしらいやとき玉孫の事なりくの人なるべし
四位少将
くひくしめかみへされとら
ねそいてしまう
自筆此家治まとくま
つまるんば此八文字も思ふ
やうま人目を見るべき
おもはん人もまつて
ハといひさかうこはたくま
つゝかへいし

ご如月ときは四位のかゝめとゝころなじうく　細書生の帝孫よりも孫王とく　河内八年三正四位の事也　師の後帝国只王氏の
ひとめをしのぶべきおもひしうゑていとおし
かりそそしれかやどのべきうきりく
つもおひてへいじとの人をこゝろをげの
とざろうろこまふかめとそぶんりくえつ　孟　龍子夜人
りくみしまくり夜らく　としてらいはじ　細　君女池く
もとめじらのさかひおうんはおりさ夜之
やまつうろ浮くと、えもあるべしの夜　細　白毛女之
孟　句のうろうまうんまも　はまつゝうつすとおもふしぬはるを
へかへろさ、如うさう後かうめりえ
いてよしこ先のひりのまで妙りしろきかへ

かうされふくまる
此里にかりしる
よ如文此姫君よいひ
しと思ひひかひし

山さくら　細　姫君のおもり
と廊しくさく此みをし
とれいとく紙帯とするむ
六曲ま見いへりば如あり
つくしと門しそ八せあ
君のるかとよめり八姫
かぎりとかりてろろと
ハ此寺の羽まりいを
がりて二樹の陰まきそ
此花の枝とれつりとい
ふ如年まおつきまつり、お
るがら子鹿鳴のるくし
のんまハおりべんさ
のとおろくこ　細　君のに
葦つてみてらし枝ぞ晩
とあろしに一夜ねり
なりゆりとえとひえ
んく孟君の地之旬文字
此に一夜とありまゝ故に野出
つましえとや　そんとく
ぐしくろ　細　畢下したに
かくあ弄くこの浮んき
しみくへあろへかゝは

孟初
松をれし世路くはとゝきまさつて梅も人
上童
かくそのおうしさしてゝそかくり給
白実
山ざくらしめかふおくらに弱をそ妙あ
細山寺　まうりし孟注
ぶさしとかりてぐろ此暖をむつましき
あさまん八月をまた
とやおりきん浮くりいかそではるぞ出
八文字の夜
えまくて如月しうしつふしらかうのくと
つゝひのくた浮吟おるんもりうの夜
ゆざくまりしくりそおす月ぞのふうと
中くみくこてをるんし待しかぞかる　若
逢て
人べとも出なればは中の君みぞつしとあり
始よ
八実
かぐしかろ花のさくらま出で川のゝき
ねとゝるぬ君のさびん野代なてしれしい

堀文をとゞめがたりけるとぞ　師　花ゆく人のかへるさもわすれしをおもひしとぞ
秋とならでしもと　細　河海引寺不付死ころはすみ大かたりの帰るさに付てはおもふべからずと
おぼつかなし　孟曰　河海によりて云しも何白かうん秋の夜はいつれもりちくるしくる尾花を
花かぶ文の気分て文かうと何ふかうんのうちによらうすりて云まてり
げに川風も　岷　義弟の河風
の寄二首をうけていふ云
し宇治殿と八文まて
との毒守の悟の子なる

蔵人納言　細　紅梅之上よ
事の佛ゆずりて来りける路
てり葉ちら私に参るなる
ぎなかるべし　孟　葉八私
ままりり蔵大納言八紅
ぜりそてあらく紅梅文大
なし

とかうしけるほどにくれはてにけり　あまつさへ
川風もこゝろよりぬさ海よ吹よりのく　ここのこゝろ海まよふく
ちどもとおもしろくあそび給はむやくしへ
藤大納言ゆかりをくしめくらまうりへ
あかきこ来りつどひよのさいへしくてとなと　孟面こに
ひかり給ひさへそあらどうそその　きこゆるに
こをしれもかく文まきこさつくべさつひ　細　白ことし
ちかくと出かゞそ花の盃ゆく四方の霞を　細　草子地之
みめやう月どのこ前あろよふくのもや　孟　詩寄く
まよのを寄ども出かうれど。そうりさくい　草子地也

まかゞてありて云八
の心ゆかしくもは八遊え
しあてり　孟　白文より
細こゝろもし葉の方もち
の傍ふうてもしろさ
ちとさうぶすてもえ
こと関のころす云の傍
しうりうり　仲正
文も次さうし　細　八文
なりむつくうら海
つぐくゆ秘つの心給を
え師　元八自文の所ふる
くゆへうよ云ことろる々に
とあてらしし八文の集和
さ系れよ二向よ秘縁ある
て姫君も君なりまま。
よのつるのへの類れる
らバてそどうく　思当も
云ねんめ元八自文のな
色の親乃をさひきさ
るうべぞれバころすこち
も継よのつるのけらう
めきそてもこそてあぶとま
ドそらくのうへ

よびるをこうぬるり。りのさはがしくて云ふ　そのうり白文のえく
まろなもえいとひやうどてなりみりとさ。おなじ
文八物得してさうべるうくてとれ文をつれ
ままりせう。文めをとう紙とさたえまへわさと　細　八文大く　猶縁ありて君なりまたよへて姫君ニ八
けそうじららてもりくるすじ。中にころ　文の狗く
ときかさこふをぬめべし。いとすさまる
みさうれバうろへるどこて給ぐ給つをお
らぬをこそひるめりと。そゞのりし給はく々。　姫君ニ君ゆうを御ゆうふへ
中の君ぞゆかし給。姫君ハかやうのことさ。　細　姉君之
いかれふをりくそあうれまつるはこてらふ
かきなりい川とうくへ得そきされおり
さ海よ老のつれぐくさいとぐらうしかさ

はくらくときめきみもあらん〳〵し　罷さるもおそろしきをけさくしづらなへ
又我もらときめきぞろやうしろ物とく　細　師
まざをよのつのけさうめくさてもりて
なぞくかくりてらとくさめきよぬくとこ
の我よ無想そうをされどもしらけぞりてらとくうきて
ひとをさまてるみをすれハ孟白文のまりなり
うろへるどしをゝ、すひて、字治よりやうのへくそて
きひてうくみいあらむぞくるへすふ
みもあらぬとはんえ
美のつれ　ハ　孟　出ひやれ霞こめ山里の花すり川ぞの美れつれく　上東門院ハ稀
くるかめ絵のびきさり絵流すあうくら　細八文のはしえ　師　姫君のをし
としよく絵さん八あくりまり間しくかりしき
とまくころぐりしらうりほみとかえを消　細くこうりよてあくえとし　罷
しりバあてしくあしきさのとひらと　かゝ山里よ隠れまふをも
くやわくきりるどく明言ゆ〳〵しきぞうわく
ぎくこ北又中の乃へ北二まづて姥絵ろ〳〵文を
とりつくしくきんぐもくるりぞゝ　八文の[illegible]物と

そもさく八　細八文里よの
まきてく画覺しまうりその
全い〳〵のうし　罷　八文のうりの

そのきり那て孟日
ぬれをかう絵よのあくせぞる
孟旅人をあつれかしとハ
まぬのあらし　師　十分あうぞ
とも大りくまでも世の文
えおしらぬなぞのへと
拳みもかかくて
ゆのぞくろよりしろをゆえ
ぬくぞそひきて行あるの
ましいまの実もいさ姫君を
をまう実よ流るんせんとふ
人わるのハ文ハきうもぞや

がそく物がりしてはととうるひつるのまりと
さあころくせ絵世をよこゝろとしめ絵く　後世の徒何となし
のハ出ふらいぞぞ我のこと物がせバ深
き道みとをりむこきのねべき我で　後ハのなし
の流しとじりのいろくしくうきる　孟　姫君の手を八文の流なよ母りとく　八文の石ハ[illegible]
きほらづきさすれど、若今いつしこそて　固まれどもえ
絵つん流らうろくぐれるんとこをも
人をそりうちてゆき我がかぐもとき
よいあしぞもとせゝうのめるきそも人
くらあしらりもりうゝ母うされぬへどく
そのひとのまぞろよましろゝゆえしん
ゐじ、出ひよりをしてゆうあらべいんだくが

まそゆつましくさ地をとし
一所世にとゞまりきゐるべきならて
かゝらバ 姉君か中君に
ても一人は聟とり給
ていま一人はそれにそへ
かりそくつきそとく

抄 その 二 便宜
のやうにはなるゝ人なども
あるべく

宰相にゆくるゝあまた
家すそておかせとも法
さらによく因縁に深め
まふをあるまづるゝにけ
はるゝくしくらひさ
し

みなゆるしてん。一所世に住つき給ましく
かあらバ。それなくゆかりくてなるぐさめ
給べきを。さもあるまでふかきこゝろばへある
ものゝ人いりすし。まれく いひよるやうなるな
ほよをきゞしとこそしるもひとみ。
さらくしこ人のこゝろのすゑひさしりの
あるまでの中やどり。從來のむすめらば
つらくとも。さしこそげゝくさすがに
くるしめ給ふる。ぞのつらおもづ
らうしげなりそしるもて。めざ悔しうそ
かげのかくしきなるせ給つぞ。二宮ぞ
かはらでいやめでしかたてはらひろかう

孟 親ふよりも人もあるまじき
細 白さあり
孟 そのこゝろのあるまじく
孟 白実ハかくふかく中君と給ふ

きりくさまや 細 可然人
みくもしまさる昇進を
もの進にあるなく 孟 薫
昇進をいそり 師 此段
ハ下の文にうけて薫乃
昇進のことをいへりに又
一段上の文につけてみえて
宮の中君との宿因を
おもかやとく此段にさる
がくさらづさるや方へ
しもんと後見べし。細 花
古段何も下へうけてよ
まれり如何
その秋中納言に 細 花香
年の誤ハ家よりも出来めく
くぞの秋とハ八宮失字治
にそ表後ひかし年の秋
八年紀に二薫宰相十八
の秋とみゝえて年此誤
わくなり行河によんゝ
の昇進のことをかへり
も付と白く異 無ア民実
の宇治にておそびし
給その年乃秋としえり

かうやうなくさうやおりしけん。宰相の
中将その秋、中納言になりたまひぬ。いとゞ匂
ひまさり給。世のいとなみにそへても思
すこと多かり。いかなる事といぶせく思ひ
わたりし年ごろよりも、心ぐるしうて
すぎ給ひにけんいにしへざまのおもひやらるゝ
に。つみかろくなり給ばかり行ひもせま
ほしくなん。かの老人をハあはれなるもの
に思ひおきて、いちしるきさまならず、とかく
まぎらはしつゝ心よせとぶらひ給ふ。
宇治にまうでゝ久しうなりにけるを
思ひ出てまゐり給へり。七月ばかりになりにけり

細 薫の中納言
孟 薫の実父をおもひやる心也
細 柏木のことなり
孟 柏木の事をせんとなり
細 弁君の事也
孟 又宇治へ薫の事也
濁

薫六二歳にかゝりの宰相ふとくの此巻いふ記あり。不相当なるべし。橋姫に宰相中将とありて此巻にも中納言とありて三年のちと云竹河に人々の昇進のうちをいひし
同時の事也　孟同
七月ばかり　細　前にも秋中納言になし先達て七月ばかりまでも見えたりと見るべし
宮ちかく人の心へるかりのころの事にかゝり深ありへし。昇進も十月なるべし
音羽山　細　松虫の初声
さそふ秋風ハ音羽山より吹そふ侍ぬらん　菅相
山ハ秋かぜのさかりとなりぬ。音羽の山ハ宇治にちかく
のよし
槙の山べ　細　わかりて紅
さまく宇治の近辺を
いへり。橋姫の巻にふかし
あり
たづねきたるに　細　都より来る人
なれば珍しく　孟　宮をもがらぬ
猶西宮の
宮ハ八宮の事なり
細　前の羽よ宇治にま
うでく人ハ八宮なりと
いへ羽を猿より

よそり。都ハまだいりたゝぬあきのけ
しきを。音羽の山ちかく。風の音もいとひやゝ
かに。槙の山べもわづかに色づきて。猶たづ
ねきたるに。をかしうめづらしう見ゆるを。宮　孟八宮
ハまいて。例よりもまちよろこびきこえ給
ひて。此たびハ。心ぼそげなる物語いとおほく申　孟八宮の詞なくなくいとゞ
し給ふ。なからん後。此君たちをさるべき
物のたよりにもとぶらひ。思ひすてぬものに
かずまへ給へなど。おもむけつゝき

よのりありてさかひされ
細　宮ハらくのあれど
此ありのわきまへ
ら命のうちハえぐ
えなるべし
さうさみへくも
男薫御家の安置する
どハとげくうしを
えもとてぞとく　孟同
夜ふかき月の　抄八宮ノ心
秋によりひきよせ歌
しかる
此世の世とく　細　八宮の詞南
此のことゝいふいやりあく

こえ給へば。一言にてもうけ給はりおき　細　薫の詞
てしかば。さらに思う給へおこたるま　姉君たちの御事也
じくなん。世中に心をとゞめじと　八宮とも看捨たまふとく
はぶき侍る身にて。何事もたのもしげ　薫のみづからの事
なきおひさきのすくなさになん侍れど。
さるかたにてもめぐらひ侍らんかぎり
ハ。かはらぬ心ざしを御らんじしらせん
となん思う給ふる。ときこえ給へば。うれ　孟八宮の心也
しとおぼいたり。夜ふかき月のあかう
さし出て。山のはちかき心ちするに。念
ずいとあはれにし給ひて。昔物語し給ふ。　孟八宮の昔ありしこと
此ごろの世は。いかゞなりにたらん。　八宮の詞

くもり　細あかき月といへる〻
あれにまさるべき
琴　筝の中のうたに九重　私云
中なるく　抄今の宮中
ともむ所　宮中呉音也
とかくまでく

とのうたくいひてまし〻
細下よハうたねくむ
心のあるまじく〻
情とうれしく
秋のさき頃の人のうたあり
引歌　秋の夜ハ人をまつ
つゆそつれなくともさき
かへし琴の音まつそそ
つゝ河

行手かとして
細　音羽む
とあのかたといへるく
此男の女めしとやうくの

くもりなくてさやかなる秋の月には
萩の御あそびのおりはさらにひあひたる
中に物の上手とよばれしき限なく
よろづのことをうらやむしさらにしく
あはさまをもうちしたがへるあり女文
秋のはつかぜのくのごとくいひてもまし
く思ひしみの情をかきすべてかくす秋かな
き頃の人にけしきあらぬるはこころやすし
くらはきうく月のまへにいるこころひあつるを
の書たびきてどころあるが御用るべし
なれおぼしかるも女はりてあそびの事
はかるべし物もうすこし物もしるしのなかに

されハつくの　義人の心を動
かす物なり故に男も深かる
しとく
とのこハくしも　三　男女
とくにかたよ男よハおや
のふかさふかるすしもすく
うるべしとく
女ハ限ありていふかひなき
方よ　細　女にハかなし
と思ひて　もみな同じ
いうさかあるてらんと
細　男女の差也　盃　世のなかす
のやうに作られしこと
私説心のうへ　業の心
く師同
とべくあるよまつ
細　業の物語男ハ思ひ性
かよやかよハとめされ
どんかを少てかとう
所あるハさくやうよく
かうして以なすあくおの
物よ世の中に心とさじ

さうざうしくさびしくんかたのあるべくさふこれ
べつきのかうさにやあるらんその方のやうを
よやうみもものといひてさまも世やのこころ
とさぎさまやあらん女はうかきあうく
いふうひかさうくするよりひをうるべきにも花
いとうくろうかるべきかうじた方のく
よつけくの緒つるいかにさ世用ふらんと
んぐりしくかやらて心のうらたる
もべく海をとさるかりひのへ事てくう
けめや作らんをかけりのわきをかへくいう
みを以つかもかうともさうのけれ
とけなえくろさしくすれどもぶをか

とふつき給ふ弟子てとそろふまりてさぐつく徒よあろふひきてしつくるの音
絃よりさら也て勢る世のすをふひ捨てらけるや。自身の上よ八絃の藝もふひきてくの
ど代人のきく弄へんとゆうとて。姫君の琴をゆうしきとりそんとていつう絢く

えしうひつきらろせう
細河海よ見てくう優婆
塞のきるよ對しこくの旬
うれて經合くうるすよ
て折りしるし 河 香山大
樹緊那羅於佛前弾琴
瑠璃琴并八万四千音
樂迦葉尊者忘威儀而
起出 文句第二ニ引 大樹緊那羅經法華
乾闥婆王奏楽直得須
弥震動大海騰波迦葉
起舞 傳燈録 花大樹
緊那羅經云大樹緊那羅
與無量緊那羅及無量乾闥
諸天奏八万四千浄妙樂音
来至佛前絃歌一動聲
振大千須弥山王涌没低
仰一切声聞皆従座起猶

づうころそおもむきこゞろしれぬる
まりくれさしうひきりじ河ゆきそうも。
されはやうちてもひ給ひりんるじ中でく
て。おのぞ一つ忍うつしれうのかと。もと（細 弟子うし姫君の御琴くて）
ちよゆうしうりさりへとぶとくしうぬ
ろしめよきもしや世間もろんがど河かう
わすさよ入まてどうよそでのりきこと（姫君乃弟子）
給。さうのしとぞつと胸のうるうことな（孟 姫君るる〳〵し）
らしてやき給めう。いとゞ人のけもひをと（あふこもこひしきこ而の旨）
えくあられるりて姫君ときまうて。丙法に海（良くうる〳〵）

葉言少欲知足頭陀弟子乃於今日猶如小児迦葉答言非本心也
きうくしらぬ 細 八絃の人く叢とよのきまへきはしめおもく 孟 八絃の人よ姫君と尭
よゆうしてやるとおもりしられ八弦のそうしうとく
こゝしろきこゆかりそい
かて浜布もまつさそのも
ろるれバくとくらに叢の
らうべし
ゑうこうしそめつ
細 琴とまうすもと
三 琴の下りとりあ
なり。ちすうしきむ
ぶなり
とられる 細 あき人とい
つり。妙楽をこふ人との
孟 しどりの八妙楽ありう
ろうまとの妙楽あのり
きわりき人まよゆつて
んとし
餓ゑて 細 一ことハ琴の
ちく来て西まじくと違
師へとひ八絃のうちきあう
みもうくまるのしとて
ちよしそめつうへの妙
米八よ西其ごとそれり

よはづしとるさおもそびのくよ入るくだり
しう世間ゆれどくらうけくをいかぞ（孟 太君と中君しえ）
うハひきあるを給ひん。よのゆしうぎう（是より八絃の旬く 吾説）
すくしそめつるおりはしどりれあどらよ
ゆづりきこしてんとぞ。こやそ仏の法華よ（三 物仏菓ゑあとし）
入るひぬ
餓ゑて 菜のいのりいあれぬるこの一こ（公実）
とハうれじとぞきふ。うう對面も此夜やう（是も八絃の旬也）（此法よやぞて夢しまふべき希表ゐるべし）
きりるらんと物心明そうきよ。世ひうのてう
ふくあるしさひかくしおふ。くとあうめうれ

くもかものゝく一言は琴をとそへてく姫君は琴をとそへのりて菫は小生と称とすゝろとぞそゝろ
うくおしきひつらし
やらひつらしとてもしおりつく
いろうん　細　我らく盃
ふましさとく　盃　ふれ
んましそわりまじきとく
とまひろとし　細　河海は
みくらり河　垂仁天皇七年戌七月當麻蹶速与出雲国野見宿祢ニ令撲
又云神亀三年ニ令諸國始テ進相撲人ヲ　元七月十六七日間相撲召仰也六日内取丈九日抜出八月十六日
お撲とふる八法の
供御人をとりわりく
七月は相撲節とふす
と名ひて天子の御饌を
あくばどめとバりわく
せともし殺まそろく
供御人をとハ該当とゆく
年中行事　新名院御饌
所合ヨコエ　あり供御人とハ粟津ノ
りのく供御あじもらむ
あゆくろて
まらぬりしるると入
とろり　差の
のくぬきのらいろき
のとく
きうりれとろりそゆるひ
きかりの　ふたは八宮
のさうり姫君と菫た
ゆりしあひしまって
みんまの恵れぬ
よろく
もそるおれてそとのろ
じきことく八年すぐるよ
一向まかりけるれて
姫君とのすく八とひきん
ふれとく

とて　らうきぬ　まらくと　菫
いまうん世まりかれとんるりさきのちさ
てもとかあうされいわり八ませんひろどはや
やけくとぞきまきされ作ろこわ五ぞはさ
又年ども　ゆし給　まるのそりのとんとそ　細弁く
給のきあんか出てくる　あかり旅の物給るど
とさせ給へくさの月とく海るくさし入て
もとさけ月海めり　給は兎でもたく
ましてかりとも世のつゝのけさうひて　菫の泊く
らとどころり　地給のどやりまるうそ
つりの□ますとさうぞされいりんなとゝ
えまへ三ゑ八いゝりし　盃　白のうとえ菫たの菊と立出ずかく
どとふのうちふは去出つうりうてろ
あすしらば人かはりしまりつしさびり
まれてろりとゆるひ給ってのさしも
いそがれぬようとて大ろまとくるぞおろ海
じきこしくとさすくもまてぞらやう
あさつりのまふと叫のしそとし　おりつろ
されりみちまつけて哀ともとさけを
を物よりて　おゝわくりいりの給わすり
ましばもくをこえとかくおりさ海かもる
まれば　菫は深うくてまさその袖を涙給ぞとゝ
つ給さんいさほすぐよくちわしくへく
盃　姫君と菫の袖と世しんちろとく
つきやうじくうらし　くらすぞ衣

心ほそく　細　八宮の御さまなるへし
猶の手ならひなとしたまひ
給ふなり　孟　八宮の手
の跡なとも心ほそ
きやうなるのひしるしを
葉かたへなるのくちみへ
まはかりそくなけに八宮の
心作しるなり

女きみたちにならハし給ひ
細　白氏文集にをさなき時より
ひかすとハ声のなりまかひ・
るとひりのこしのやう
よそへまくとも思ふきこえ
まかりしくそおほくて
白氏へのはなちのこと
ふして思ひも物らひ
とくおほもわきてけさ
うちらてもさてるき
しとおりしかよおほ
林に入ていとゆくまゝに
八月ハかりのちかき
物によりて思のかり
なり　孟曰

かうさ経よくかりまぬくらかそくあらかすげ
よ払はいとりしはなしきれ出てまて
給つつ。さはがしき経ゐしくまくてんと　孟　お撲なとのること
宇治、荒アつの文もはわきれ限りよね　白乙
こまおりし御さんとしさうへきつのくと見限
しめぐらし、はふみハことまどすりあ給、せん　中まて
るしまめやうよまかもらんとも思ひ給
ねんごろりしくとあつそてちるてき
酒よりくなしつくおりくよものとうく
給おきかくめもまつに、宮はいつかまう　細　八宮之
物心かそくまかし給はれは例の静かなる
わりなく念仏ども聞きるれうくちんとちか　細　あさりの寺まてしまへるく

もひすくきしかうく
師父母のかく一人なりと
もおりてハいま一人ちき
かくのすハとひなくさむ
るとおれなく、

されともさハかりのうよ
後光人ゆかりなき作品の
ろをは輪廻して未来世
ともゆのちるんすと孟言と
へ阿含ニ八千不願出ニ
冥ニ長夜從生死ニ　十住心論
とつくなるかとくくよ
うくさそえなる世とさえ
捨るかしなきわとにさ
とひ姫君をは御ぶる
とそ文のそりとひのよ
へきなりはかりねとくん

しても心ぎみをしきりへとくしとくし給
世のこともしてつるのるれとのかれぬ　細　八宮の御師世の事ひとしく
よしさすのれども思すくさむくこわりく
きらうすしき絵も宮をりのあすあれ又
たまつ人わるすく心ほそけらはなる経　作意違とそ
どりかうらむそくしんからきことをさ　八宮のく世きえ人ゝとありての事く
れどもさはちのことよさ宮さけられ
くるかなき世のやまよさへまとちんやや　書
くなきら川こなる経あるよ思ひきつ
世ばなられうらのことあるへきこと　細　母上
よハあるめど、観身ひしつよおもどさ給　八宮乃御方乃ことそ　とと
おしれみりて心せるよかなかくくもの　あざりの人々かかる宮にとて文之

おぼろけのよすがならで
人ごとのあれつるのよしをもて
なのめでかるゝ人の詞によ
るびきて此山里をあく
がれ出給ふなといふなり
此山里をあくがれ給ふな
孟 八宮の姫君へいふとき
てのひそかにし
こゝらの人ようひかるが
かきりてはなりなか
今までも此山里に生
立たまふかれにしあるや
うに世の人にもたがひさ
前世の宿縁によりて
身と思ひとりてこゝに一
生をあかしてんと
ひたぶるにおもひしなせば世ハ
しハ物也 一向に思ひ
とりてすぐせば年月も
すぎてゆく世也といふ
細 八宮を古き宮回縁乃
姫君の後も何かし
て佗付まうとく

ともつかひ給ふな。おぼろけのよすがなら
で人のことにうちなびきこの山里を
あくがれ給ふな。たゞかう人にたがひたる
契ことなる身とおぼしなしてこゝに
世をつくしてんと思ひとり給へ。ひたぶるに
思ひしなせばことにもあらずすぎぬる
年月なりけり。まして女ハさるかたに
たえこもりていちじるくいとほしげなる
細 姫君達の心中也
よそのもどきをおはざらんなむよかる
べきなどの給ふ。ともかくも身のならん
孟 八宮ハ片時もおくれてハいかでかへんと也
やうまでハおぼしもながされず、たゞ
いかにしてかおくれたてまつりては

に佗付まうてしおりて 姫君達
さらにこゝそこりて
て人よりことやうならぬが
くることを思ひき
宮の後の別をのがれぬ
ことなきことハ身のはし
なきさきやうにての路
つべし
明暮御かたはらに
今ハ姫君達とく朝
夕にはなれずおはすと
つきはなちて
つらき心ならねと
八宮の御心ハ世をそむく
まふとても姫君達を
おもひすつるやうのつらき
心にあらねども
げにうらめしかるべき御ありさま
姫君たちなん 孟 八宮の御心
この君ハ一所にひかうしき
中なりしかれば
こそくちをしうてすさわ
まことのは 八宮の御こゝろ

世にかたときもながらふべきとおぼすに
姫君達ハいかにして
かく心ぼそきさまの御あらましごとに
いふかたなき御心まどひどもになむ。心の
うちにこそ思ひすて給ひつらめど、明暮
細 八宮の心の中ハ入師 姫君達のはじめと思ふ也
御かたはらにならはい給て、俄に別
れ給はんハ、つらき心ならねど、
げにうらめしかるべき御ありさまになん
く絶る山籠りし世を捨別あつこと
ありける。あす山に入給はんとての
日ハ例ならずこなたかなたたゝずみ
ありき給て見給ふ。いとものはかなく
かりそめのやどりにてすぐい給ひける

山林より深山に入ハ
ぐ郡てうせまうべきな
ありく
[illegible]
りとうりかやまく　細下鶴
うじハ天うさへ有らさうて
事のあるく師下鶴の
うハ何ごも世に私居
なき猶られども
人ハ何ともいはずして
こゝろをとゝのへてりうと
て他人ハ何ともいはふ
くれどもを身そて八地を
まづをしきそく
にあらでまきそくん人契
くうじけるく　承わ八ねそれ
分しこゝく・宮とも王孫
しもわんん八の前世の

なはすまゐのあ一條と・なからん後いかならん
てくハわうきんのこゝろりてはまかせひ
縁ひんとかくそでつかへをし縁さ後
いとなさしげうらひらくひらん〇め
出くうしろやすく一くうまつれなずふご
ともりとうりかやすくふしくても
なまじゐにてハの人へまの地まろへもつねの
ことふかくまさまぬべかりけるを
よたらめれたん人ハ何ともいはざら
めどくらおしうてさすまへん髪へさ
じけるかいつも行〇て〇らん地獄ら
るへさ・物さびしくらうかりそこしぬ

志て流派さん八ぐそ王孫
とつかなのすめ地そされ
分しこゝく貴人の心
まもおろくしと去りや
ふくそわりし　細　菜摩身泥影与身に
それなるり
そのうろうかもうるかう
ことせとさうくハ
師世界の豊裏ハ三尺
し前世の富因なれバ
猶いと〇ふ〇〇〇〇〇
あるし比世とうえ
と之世とえなうかて
何をとそくとう〇しし
こゝそてまワうり　孟
のうハ八文の深うまで
知形表の〇〇〇比動
そのうに入るひろすうし
下くるハ世をとさうえ
ことをいう
分くんなし　細　八文の
宮に入るものうでのうのか
かうえるハ世をとさうり

うつハ世いのこゝろうりしまれうう家乃
〇〇〇てのまゝよりぐるすこしんん
るんさしくかともうごくらかもおやゝちら
すくハ地月出でさかれさしく人をと
めんと知りふとも・それうくろかもくる
ふましさてうしてるすへハ知え
ちくらしぬくてよりそてるすしきこゝ
みたどの縁わざ暁よ出縁とそもこゝろ
さるまてさらかそてかうるん深どうつろ
そくろ地わりしらひそくかうりしやつちく
わそひるどいきかへるかよごともいふよえう
すなましきせとかれ地わりいかにてなるく

きりんさいちり

ひとりく　四位の地わ
せく前衣きんの方
の個ようたり五寸の
ちらひとりくら至て臭
これよいー
いまの事も　三 女児才八
行きひちそりありしき
うなるべし 師匠八座
弟の世存れハ六年ども
のまし別て八年とかハ
しそのまえ

二
やましくそえまうしな
五八宮内なりやこ之、之ま
そしぬといふうり内お
るをうく八文ひふ八山
よりあわかへうこし待く
とて出あくぬき

まこうちかく出すぬ。ふくさこそいとう（姫君きく）
そろばそく物書ひつげしれく物書ふ
しおうえひつ。ひとうくるうしまり
くバいりでかあしくさ向し。いまも手も
きぶめるうきよかくりいてやうしも
あしいるすじるさこへひこ。きそうれご
もと返かしとおるすじてろうよわくさ
めりしくろひ絃のあとうひ八絃三昧。お（細 会絃三昧之）
（五 山路の会絃之 姫君迄の思ひやりまかせ）
ふくそめうへといへつうと待寄し絃夕
（八文ら内蔵く）
書よ。八まつうく。けさうらやまう（風気とも）
てるん気付しぬ。風ろしそとうくつろ
（てしうろえく別かるし）
おいりのもとうつ行よりまんぢうは別

きりんさいちり

ともきひめんちうりしろうさとし御めく絃
（五 姫君迄之）
つりむぬつぶれていろするふりとおがりうろ
げさ。御ぞどらとこさわつくいそくぎ
をさせまそ甘れるどし絃。二三日ハ地り絃
（姫君ら内とうひ之）
わぢいろよくとへなりまへでごとにお（八文の内せう之）
どろくらしくハあしくどでさこえてとらく
らうしうろんをこうしとうろんちうるう
（ろをとりるとそておりるらんとく）
バいまのへじてるし。ろ聚ふまそとて絃。
（細 阿国梨肩気しまかく）
あをりつしとふらひてつうりまつりう。
（細 阿国梨の戸細之）
そうるのさいるやうこしこあれど。限りいひハ
（細 姫君生之 五内んさくめ）
みとおりしまそらん。気ぶ迄の内井ろうさ
（まひそとし）
うぬりするげくづきんハうれいらとくとく

なもくせとりふ細とく
五それくの姫あり地

古き師それぞれの名々の
家説にて秋の七夕より
とこそすれおもしろきず
もあれはとて
今さらにゆへて祭ると
細 此等の事しらぬ祭とあり
えんとより
いさめしなりけり
此頃河図絡に似合
頼みなしにいさめしなり
なりとてハ茶子池の花に
くはりとしるべし
十月の月乃
の事にてとあり詞面白
細 此詞深紅
ゆへに

いつ頃しくすれバ為くはしらんとこそみるとも
りしまさずしいふく嬉しくて見えまうしと
と思ひしたてせつ、今さらにゆへて祭ると
といふなりけるなり八月九日の経なりけり
大宮の室乃菊と申しきこえ給ひし
ちハ先夕ぶりのくもりてあり、嬉しく
ことさらなり祭。十月の月乃いとえ
おやうにまし出しくおの嬉しさを申しけれ
むそしらぬ祭そのさのほどもあけさきそ
まいづしまうよ夕のこゑさそうよひく
さそ明ぬらんとさてゆふ月にもへん
しごれ夜中づらりよなすんくを祭ぬなし

すくしもくゆけていはるとはさえ
ぞ菊のしまれどうちこう祭はおさ
おしく嬉しぬうらしていとじろ
こしよおすさもいづらりよけんさで
うれぶし胸まてう、いとしさとこるか
めのまへふくゆやつなりぬそつれ
のしとうすれ嬉やつなさそひく哀れしな
づくまてととろするう。ちぎりしふくも
ゆくれそてまうて世はおうべきさのと
ゆかりなりそぬれくちどもしうくいうそ
られとされじしるさしづくまでも限わ
おもひなりされバうすよのにひきしおざり

るまゐるとしへりりう
細 太る 杜子美 登鶯亭
郡武源とよう句を
ひろう西向し 曉 わすま
てわされさるよ八中く
源いゆうね物しらをと
つまえいりあるひうく附
地しささ見えてみうる
物し杜子美詩する心
守り五日
それそまうて
おもんこいうふしてう
とられなうてふるよ
くさ河もまいしく
こきとおり嬉思を乃
年そこるへし

年比ちぎりし 八文の詞
葬送の中陰の前どの
はてまでもおかりよ文の
作せとられしうるやし
みづからよりゆくべき
ほしよの死骸とえ[illegible]
まゐづきもとのくし
かりましふる事あり[illegible]
八文の山の路の[illegible]あり[illegible]
を姫君のことを[illegible]
とし定て前供より
しらずんし花も[illegible]
きりの下知ゆへや

年比ちぎりしきさ給ふもまくまのられ
はてしもしらぬ川よつりうきるぎなき人
よそにすへらん[illegible]なみだくらしとそふよ
今一度とかくとわびしの事へど今は
よそでうきよくうき行方ぞ見ぬを
又あひて給まじきこともしをかりと流
きばかいまはまでにとまよ流る給ま
じきはやうつつひとるひまべきなり
とめて哀也おかりしふりは給ぞ中々給
やまとあまりのあまりさうしきひまり
ぢろきよふつかしよる人ありしか入
[illegible]

[illegible]よりつつひのひ
しくくとうり
つけりきとりハ 八文の[illegible]
世の[illegible]入山姫君[illegible]を
[illegible]を[illegible]の山
君の[illegible]屋よ
てられよつけてとし世を
[illegible]されどくて[illegible]
まつりと花の名よハせん
[illegible]別[illegible]え
[illegible]
ひまの姫君[illegible]も
[illegible]
[illegible]

[illegible]さあひらんまりくてや
前月業のおりしろ附
[illegible]
[illegible]八文の

うきゆづりんなさにはじく先のこぼして
まことしけいがうりへ吹き言えさうだ
こぼすとも世よに侍きたるのあさぐさ
めも出かしるすれてても[illegible]ひのきへ
るとうろうあかたよへ見すも給ふとも
ひ給れるとりれたぬかりきこすり中納
言殿よいこうくもていとあへるすく[illegible]
今一度うろのじろかくことゆへりなり
しし出かりおかうらしてお[illegible]
世のまゐ西出づそしれてけうしうるい
給きさあひらんくしきくやうすもの給
しと行つてのりけんかとも[illegible]夕のへぞて

のちのしるべ
その八重にハ細つらぬきの糸のきれ
ま五西風によりゆく人とハ
くるしきさとしくるしき
のふかつて忘れざりし
と

あまたれ経の別ぶるに
おられも父子の別かれバ
よの老との事ふかく八文
手で八別よさわり哀人
あまれバよのうれ親子の別

うえも六月ハ鋭をつてそを見のへんも云ふれぬ
ちゞぬ世のらうちを紙ひとくりけるよ
かゑまてうしうけとくられてこのふと
日とおもくぎりなる紙をもてあるぞくられ
しく出ける。あまりのかなしさも。君
がらの紙とかしひをこ筋やうよるとく
給ふうけともつくひるまじまでつきさ
これらんでしよみすこさ法ある程るれバ物にて
別しぬ法うらもれみとも年ごろの法ら
たくの袋るありしかどちとまちり
経よれつれの別ど所別らざるさきしあ
よりてハ又さそひられやうよのそ見
かんのちくひゆうにも物るあらむとなくさ

こゝにまた人どもほとと
しせらく 姫君の法
うえも舟ふどにん
しせ給ふよこゝしせ
て御誦経の布施物
るぞしまつてせまふたる
べし
あけぬ夜のくらきより
姫君の袋のやうなる
ふまうしるぞ月日多
れハ九月よ明しとく
は明ぬ夜のくらきがら
はやきおしとあくぞと
いひし色ハさうれや
死人をれぬ国へさえを
ぬきりくもとてあけぬ
夜のくらきのまゝく
親山のあしにて紬の附安

むなさるげなる法名どもふかく。いかやう
なりくらども忘すつらんと出がしやま
ず。後の法わざるぞあるべきにこもと
しちらておぼりふもとかしひ給ふて
ふとおひ人どもようしてそ法ず経
どのこしをおもひやりやめし給あけぬ
夜のくらきぞしく九月ふきぬる暁山の
そしきまして紬の附田をのまおしが
らよどくもとれバおしそひゆらすの
袋の為しも為のひぐらてし深の際もひ
とつ物のやらよられあまひそうでれ
いかぐり。ありあらん法命をおもくしめ

昨夕の気色よりひくくも涙を催をまして此句にては衣の袖の涙とかり給
しらすうしくしくとこめくくえるへし宇治よりて将ついて一のゆくえ
風の形とし　盃摂世ともバよりのせとし給ひの国のことさとゝれさらうん

かくよしこゝろへて
姫君達を飾り女房まで
のさまくいひすくこめ
よし
てみつい金仏のそう
盃ふりそれ中陰あるよし
こゝ又姫君達の方を
もおん

ぐしひ給ちんとさつしみんでいちうろわそ
くいうしくすぐさめとくしつゆがしかまで
みこうあとも金仏のをうさうかひておつし海
ちうくうこ八いけもてよるすり給く
ほぐ気りつうまうらしんぐの給いをそ
よこまりゝうかぎりいおもれはさとこうひ
てゐ邑て若宮のえしらをしるしくあるひ
我く給ひぬうの中にうるりうすゞ我をしんらも
あ給らいかほ佐りみるれバ中納言の方へ
かくのみいはぐとかくのさりうへしとも申ける

うきかれて涙も涼しもく
姫君達の此ゝも限わ
らんと白氏のおりやう
て文まいらせ給え
とし給ひく　　細拾が乃
衣をめぐる事く小萩
く姫君達よりせらう
盃秋の山里を白の心寄り
てこ白氏の衣なるお
かうくり師　盃の此段ハ
白氏の此庵の萩をゆ
らんとて姫君達の御方
の山里乃衣をさとひや
あまゆらうや　細流抄の
としらくいくらの山里
の折ふしの歌とて

ちまくるあゆりとぞうりゆく給ふほど細お
我ふのさうりよおるまるゞつくらせ給ふ人と
ていうゞくうち給しをうくいきうりの中を
うえうびんなすさうひるうれいおりしと海
あまくロおとくろんにいみをそねに限あ
きいぬをとひまりやとゆかしやりていえ
おりくうきさつぐいまつらば時なからなうつうこ
とひるすく秋の山里いうすらんこと秋が
霧のうら夕暮いぐ今の気乃気色をお
かしとぬかがなすらんとおゆうりくびさ
うすくこそあるべかれ、迎りのへとくまて
ながめしてうよるんなどきこゆるげよりて

あひみ家の家ハ姫君達の御為にとてかくとりかはしたまへるなりし
よひくあまりさひきぬやうーそて 白氏の文より出て其宅のかーにとて
ちりぬるおもしろくもとかりこゝけて見ゆるも大君の心なるべし
あはりしとそり

細 歌ことも
やりくうら
限りあるとゝ 愁歎の心
むなしき 孟 かもうそ
まことなるやうく 御ことわり
またらでし 作ハ愁傷と
限りありもくとそ如

あまりむひさくぬやうみくびへよ
なりぬる後なり ゆくしまへなど中の君
と御のこゝのしそうせなり給ひます 細中君の心也
ぐすりへて硯なとちりくひさしもやく
ろすべき物とやハむしろうくもりなれ
目うじなさしかりとよみちうさくりかり物 若殿の事也
そとぬるらしまへバとりやうまて 机えこ 中君の事也 硯とし
そうさ給りまじられやうくわうりかきまね 紋き八限りある物とし
らんすぢしの給ふぎるに限りなきことを
中将ゆるくしてさくしく てくらう

姉君の御心
いそゝかたりまうん
中君の御あらす出来ねバ
大君なとの後よ作せ
ますり御しは我もやうく
文あれバいうくの御り
まうくへき今我ハ君より
遠慮なくあれとし
さらぬうてそまうこよ
ころもひ給ふすく八光
御りて又とりよまうん
とりてしそうしけるに之
ここるひさひそ
君の出まうし 孟 彼の
急く給よ中君よのり
て大君のおもてなし 細 姉
まうくのと 孟 花モロ春註
伊勢物語抄本 只陰り
られてもろとそにちき
くるしそバうりとく
ひろさうしよ 孟 くろき
紋ハまびきのうへまふ

けるうさ御よろくこちれておつとう 東と御本なり
をいと心ぐるし夕暮の給よりさけ給 大君之の
ねつりひとひもことてそことゝいうそり 宇治之
めうりきうんとあハ旅のしてといたせ 白の旧役とし 役よ作せの人御と
さまへどうらくりてそ良うなあとい 細御役のいかし
そげバいとおしうそ我さうらひしづ 役のかとてうりまふ大君の心也
先給よはあくれどもまつりひまひく
涙のことりやまぐれつ山里ハまいてさに 大君
廉ぞりる瀬ハいたくくうそうきよ我のを
こつぎもさびしくたれバひさつくやふ所
まつく笑よゆうをてとかつくてそいご
しはつハひハ木幡山の給とも我もしるよ こわた 孟 家之の心よ八助字し

〽服忍の梅匂し
きのくまと　細 さそくし
なく人の身こそこげる乃
山よるハかれどわがこの
身なくすり袋なる
のましうら所を送られ
くまくハひくり 師 此所段
咲花花首の段を落角
あてり 奥河のくまひ
の白和川まこまくめそ
志づしめく乳をどるよ
もん
こたく　細 さきく八中
家の主猷なれハ之盃ま
つく八中君云しと起六
太君の古あんつく

拙ちせね場を仕役に換ひ
いとやそうしげるれどくやうのかれと
きひんとく らすみじて絵ぞり出絵ゑんむつしげ
からくの角とこ角しくじむら何ごとと
仕役倒急出しし すくしらちやめくみぐこれよ急つきね
白のし 仕まへよめしても。びらくめれてまりされ
役之 ばろくまふさきくげしんどしよハおもね
白石 てのゆまそくし楽しえすびゆきくりてよう
づきしらりきざ角たしび絵いづれかはぞ
まゐすしんとうちをとうどとしらんじ
師出を つどみふと楽浦よのこりしねへゆち
うをおのふてりまし しくて楽さおりしまくしらんとう

まこ網きり　細 主紙
らつりよう有よ形く
遣しまつり盃白より
又宗法へつりしきく
師 人のゆゑし姫君字
紙らりりきうをいぶり
く云ひ主西へよとしを
しつうハきろく
網君よ友まとつせう
盃八宝よきれてま
しまきしと義も深く
ちひやりしく封のそそ鳴
ぞちあべき林夢に家ま
どつせう底にハあれど
師 友まししそ八宝よ
をされまつるうを楽も
ゆせうり
りろ数ハ 細 ちひよハる
うもとうろ出しとて
く盃白洞く師 姫君
の在云よ對しそのと

しくすしんと仕前たりつくしくめつ場
師出に鎖くされしく みめしてゆくこころし由ねかさされバちめ
まへおぐ郷ぎりみつさあしきよいそぎ
楽きてをすりまよ
白 網きりよくちまじくをせりきのねをと
ろ方やハ義とをこくりろ都みんとと
細 さ方の心 師云へ ふおじくてぞしとあれどおそらすけ
よ歴方わんもめみとく どくじもうさし一そうのれうげよ
うろへ絵きのを祈りそてそ何ぞ
そしゆもくてもくつれころうりか
よみすらんてむちずうろしのゆめこされ
八文の 遺識ありし 霧みつくもあしへうむろめさげよの

一とくとく
一こゝろの法体は　八宗のおりせし時八つ行すも宗をも我こ[illegible]
名れ宗おりしまさぬ[illegible]
親鸞の[illegible]も[illegible]やつ[illegible]
[illegible]明　面[illegible]孟[illegible]
[illegible]
月之苑　藺相如[illegible]趙
璧[illegible]
[illegible]
[illegible]べし

[illegible]
[illegible]
おやさなん[illegible]
此姫君は熟[illegible]
[illegible]
ふよ八[illegible]
[illegible]情[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
孟子[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
細句
[illegible]

しき風情[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]姫君の[illegible]

ひんしの[illegible]
[illegible]
細　姫君呂へ
脈君[illegible]
やつ[illegible]
礼記十三喪大記[illegible]父母喪居倚廬不塗寢[illegible]枕塊[illegible]　孟　姫君
[illegible]の[illegible]君
[illegible]

[illegible]
風流[illegible]
[illegible]中納言[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
細
[illegible]
[illegible]
孟[illegible]姫君[illegible]
細[illegible]
[illegible]
[illegible]

みしひがこと
細 我々好色のとがにて
もなく 師 我々好色の咎
なれは人のそしるまじく
思ひて人づてなどの
事物ともつひにされ
ばなく

ながら御まへにはひかり
眼病 八月日の光もみえぬ
事にあらず よりしんの御
よろしんもつように そことこ
とをえて 細 薫の詞を
ことにえんとく 師 わざ
てからとつかふやうのこと
月日のかげ 細 月日の

えし給ふるべかめるみはかそひ給へ 細 薫詞也
で。孟 八宮の御事の心也 師 宮の御むすめのやうにおぼしめしける御心ゆへ 菊のれうにむけよそつくさし給へ
んさ給ふらんとそ思ひしけりと思ひつゝひ
まぐられなりびる思ひつゝいふ人ならひ
とさらひ給ふるわざくよせしたまはん。
その御ふまつてさなくてとあれはおさまし 細 大君の詞
うい思ひてなりし侍りやうなれとも思ひさ
御さんぐさもるまじくれ侍りてたる
ん。なつかよそくの日なりしえ給しん
をつましうそえしつゆをえらびなさ 男数ならぬ
仰しぬと思ひまされはあしくいつかも限る 薫詞 かくはもの前は可恥とて
きれいなうへのかくをよふるん。月日のかげは

ひかりてこそあかくめ月
日の方より照らしとえ
いつしかうへきそそと
ゆくゆくもなく おまり
ならはけむ給ひて女人の
ゆくへなるておやしく
んなしかるきけるも
くとし六合点御なつ思や
れともはえのうへとい
ことは同し
あさくめ 細 の給ふず
あらぬはさらにしろ方
ともかくべくとく
けよこそうへひるげなる
く数ひろけるか相構
のゆき御とき薫のさくさ
おやまかくへはあさう
らぬよしきなとく
ひとしが御ふく
細 八宮現在の時しう
なく侍りあひて
とく

はなりてぐられくちくおそせ給ひで
こそ。つくと待しめ。いくさりなくいぶ
きう御覧し侍り。まさ御覧さうまんくへ
むらしくとおきうしあさこえまかりなる
んともあへば。細 さうらんの白 げよそいとくがひるすげ
なあらはなさ御ともずくさあさことえ
給はらずへのおさうしくわ御ですなじへで
せましまえんば 大君の心を薫よ順ならう らかもさそそ思へや
うくらさ川まりてじもら川かりいまて
きまへば昔ず御かくもなりまでつら
けさのべくと心入まつるうちさしるぞも
おもりまかべし。大君のこ すらしわざつまりまえ

此かうへんさ海又のきひ
ありかし[illegible]
非君達の悲傷の折ど
又八宮の箏よいひ出
あひしらず(?)箏の
こまうふひて[illegible]
らうそおもしろさけるひ
るすじハ 孟 箏のさ海よあ
つるの男くしろ[illegible]
[illegible]
けらうく[illegible]
るさどいあくれど
師 此箏よ[illegible]
[illegible]
八宮けまて日ぐらもく
ろうわ人よ[illegible]
そころよ[illegible]
牛も八宮の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
そのうるひて[illegible]
[illegible]

まこと此かうへんさ海又の語らひもうつりし
こころじ。いにしへも海やうなるうしかい
ひくうらそおもしろさけるひるのどく
（大君の箏の事とぞいふなるべし）
こし給ふ人なれば、けうとくもぐろ
よしくるどいあはれどもうぬ人あり
く琴をとらせ奉りもぐろよるのこと
ぐにたうしくるどもおかうつ目でゝ
おつらもさすぢにうてそ給く
ましかれど。伊勢のひとしてさどうへ
（孟 大君の事ともいへれど 弁とも）
さよし渚の、げにおもしろう
（箏のこと）
つるけうひぬれば、いて衣をうてすりの語。
（脈云の九丁のこと）
らうさ来てのもとさしげの、いて[illegible]

[illegible] 孟 大君の折と
[illegible] 師 びく
[illegible]
ゐを流ち 細 秋の末
の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible] 細 茄衣
[illegible]
[illegible]

けうはまして かうへんさ海、明のゝ
明ぐれるども おもしろく
（孟 箏の事）
冬のころ おさらぢ よそて 霊深まや
（きよ ぞか）
つくし袖をぬらひてかくやれどもひとくろ
やうよの語へ人を
（孟 大君の事）
ゐうそろ袖をは宮のやどうもそ秋ぞ
うしろ悪ぞどうろろうくいてゝ
もゑいひかうていへいうじく悪ぞさ
（細 箏のこと）
きけるひかくぬ入のぬすゝ ひさとゞめ
どもべき語のもあはれ、おいてもあいぬれ
（弁 大君と八宮のおうちうろかうち）
よ此わも、おいどん人ぞこよろされらちよ
わうそて、着分をうきあわ、かれしされ

いかゞあらし　細　薫の
御心よりもとくれしごとく
幻をまて八薫の募く。
それハ源の御事なる
へしるべし

世中のふかひも
二宮位世間の世ぞ
あるべし
さうさ河やよろ
孟　八宮のうらやましう
しと薫の詞
わかしきもことてんも
三姫君もうれよ世をも
しうやもしれとくつふ

薫の詞　異孟　薫のわざ
しと　姫君達といへる
いかにけくしきハなけま
はかけくしきハかけま
くもりしこさん気就た
こそくしきやうなら
人ありハつるらん花なりて
山寺しるらんやや下に
も此詞ハあり河海の説
物かたりあり　細　河海弁
花鳥の説其ニ下司とく
うの説とし　師　およ八宮の
あうしんのうち君達とさ
らべきものゝよしらふも
とうひもひすそね物
ようぞまへるてゝ心さるひ
しますく
さしみれるたるん　細　我身
もちまくつとふとく
はなうしなうくり　孟　弁の
柏木のうとをつらしと
うつてとく　細　柏木の罪
ともまぞひ候ことく

夢語りくとし巫女やうの物のとはずかたりすらんやうにめづらかに　異　柏木の物かたりをしてゆめのやうにわざとめかしきさ　細孟曰
こゝとゝ、うら人すりそれハうあ　薫の心
やをうかゝら人しとおぼし捨られ
ぞいとまつしうらしう給ハいとゞけさ　薫の詞
わりし語ゝご詞よまとうれまりていと　孟　見給ひし
じうかれし二ニ柏ハ世ゑりをへくとおひ
さりめしうへ人となり坊まもひとつのこと
へてつらさ位世中の方へも一つのことゝれ
ばしたまへらんくらさいやるうち往　ほとけ
あらぞのこゝろよるうひまつりしを。
八宮のうせ玉ひてのち　くちをしくすてさりしまうしらせつゝのつま
世のなかにたけて数ならぬ
のこしくうりうそわれ　世
細　姫君たち
そへとく
かすされよりされど、うつらぐらしうく
とまゝりまつるはくしくも物ぐるしうすゞ
えんハかけくしきさやうなれどなほまゝう
へてとぞの法ともやすくてこそくしう
けらゆうしゝ事しきよるんさうハ三宮を
ゐすきはかう物語さくしうハいてゞ世中
よおもしそれんとも此御くどるうよから
やしぼるまことの方ハこの人ハまうしく
かつくるるまぞえもさこしうゆくなれ　細　柏木よく似給ふとく
弁の心
はけそひさでのうぞそれゞともりしある。
ほしびしら先まうつらひうへのはてと
とさへとりて、かてぞてうでやしん方

此人〻の五納言の流あのと
ことまて　細 弁の乞ノ之系
答どうちり八宮の北方
と八弁八のとこく　狭日

菁の北とこハ　細 柏木の着
のるすく、ひめ君まづるか
りしうぞうくし

りうくめがうれねうりこの人〻の大納
言の流めいりとどけさくらくハこの姫君達
のうく北方の母方の女ぢ后中弁よ
てうせよけうごるりそうとし此をを
さくすりくあくられなくさうくせうそ
姫のゝの北はうくなりと宮の八ね
きりてあくし世給ふりそりと人もいと
やむごしるすうぞとも宮仕るれまくれども
ふちるかくね物よ宮めとも思て姫君
ちらのほうそるそじ川人よるし給
へるなりそり、むうしの浦すハとうしうる
し綱夕よことてまうりるれとも隔

うく人のこゝろぞなくり
孟弁ハ先のこゝろれどもと
葉ハ弁のしりつりなれバ
それとも後よ姫君達にも
くりそくあるんと推
量之

みそまうれくハ
細 ゑうつのけのすとも君
紫ら面にくしとのひろ
ようぶろやうよ、宮和よ
こゝの言葉の北よとく
思給し葉の子君もて
姫君ゆうとりそ放
思ふくし　孟日
今ハなひめをし　細 古文のより
源を何く法文など同な
しまそハ後をうとく

つらく海すくもまてゆりあかくちふあとこ
ことうらうて堂ゆりつらぐなすく思ひあ
きりぞれど、中納言のおんハあるべ人のとくく
むつかしうれいのこゝろすれバなどしる
べくおそゝしうるどハひとひろげもと
ちいとそうしげあうる方に心むはろてと
とこまてんうしとそうそろてよれくく
くそいとのし公色此月ゆりふみそてよりてそ
まれてハやましとも思ひうしろしつまみも
かりめくき。今ハ縁の[illegible]もとうめちうてら
しそくり給かもどれやうきうの姿
の給しとるどくうしりやそしうさのと

これやこのゆくもかへるもわかれてはしるもしらぬもあふさかの関
まどろみしゆめにも見えて ゆきかへる人の ならひや 八重むぐら しげれる宿の さびしきに
やすみもやらず 八かたの ならはぬ旅に 出しより
秋やくるらん 細玄月
八月今八九月の間は
秋の田かりほの庵の
おもへば宮の内
まず見えし
ものを嘆きてまつる

ておもふもしづかならん秋や八らん
まつおもふの月かげも見えず
玄のくれまひて徒にさのみ
つよなんこともしるおもひわびぬ
孟八文の住居の所
ものおもふ例の人かはらぬ
さしてしもとがのこころもしらで
いくさよりもこころひかるる
よみてあいしまらしれとむすぼほれ
くるまらいくはいかにすることぞ
徒にちかくあふことかたき
つれなきものとしりながら
のぼりぬれども
にほふ玉のうてなのまへ

これ孫んどのくどもなぞぞ
孟は会誦の具ども八つ
八の文八の所にて月の

めぐりてこひわたる
どもとくもろこしの
孟郡ハ推さるるに
よるめぐりてこひわたる
姫君逢の心も蓋の花
くらきまで

秋雲の 細 蓋の心乃内
のみれどさらにとどまり
唐ハいろいろによせさ
まの孟されぬとて蓋
の心の中に心せよとり
いくとおもへすらむ
入りのところのあさぎ
あそればかのことぞ入へ
をねよの中のさ
今ハさりとも心やすき
くの神白文の神のよ八
まとせまでとハいはむ
つきのなきりとも

まそんとすくみてかかり徒にもくく
蓋の月
かくなきハ文法もあらじとく
みな徒の人々げなどうさくそん
まゐりて出徒らんかなどとでんでん
そ徒とても ひとへにめぐりつつくる
蓋の徒佐の人々京と信と所
いつく言作りぬもとはゆかしさ
よりふたゆくもそよとすなる
秋ぶりのこれぬ雲なよいとしくに
の世もかりとなひきらん無常れや
白文に
よるいかんし徒ともかげ心もなりの
白文の命
れにも世のかひぐさよし徒今ハさりとも
そうやましきもとかかりしく文も孫んにも
三 姫君蓋ハ八文のたれ世ね所よ所をすもあり
よゆるし徒々りぬるすきなりひとつにて

やまとうたハしとおりて
かしこきかみのまへにかまし
とし
あそびのきんよりうたをうたひ
へりめのも　作りの字ハ
やまとめ宿之白妙よりし
なかめにしく龍よかわす
てきことのもとし
うかしにつけれとう
盃やうの花よりいまに
みじかき物にてハと大
志の條なり

よくつきしかさよ女どもハかげいでたり
盃のさくらを白の名ごりのなごりかなとて
まよいとつくりなきき言へる佐久名のひろ
ごりて。みましくえんよ叶ひさる人々めりを。
姉君送ん
くりいとくりかれきりむすくの言ひてよ
つがしりくさんてつきをいひよ
くしくかりぬきうらん言ぞ。かりひく
列しまつり。そでをおさまりけて明くろ
姫君生の人に
きよく八月日ちすりかりくのとぞをり
八文の川瑞を女生しこと
けりけれよ我以今日とは古そでうどまか
くきずめるきこそうでよりと鳴られ
のこるよそうしらば。とれも人とどく
れきうじゆかしもやハへんむじいう

六ひかりうさりとなろり
と　れまさしらそし
めうきん

思いまねん人げもうらさ
じつれハ　つぬにくお
れぬ人粉し　盃八文の
おしまさねば人の二品
まろもさくらうなどえ

盃川言　嶋の雰りくの案や世の中れとくれさもと何さ
八文の情名世の沙くとし
六げるよきなしくことを六川ぐらうと。何の言れ
ありげるわ世の中も幸くさもなれどくらぐい
川くるりくのどらりまるあと言ぐ物ゆそら
しくつくおしききこともおすくてへつきと
のと風の音とおもらくうよ。思いまぬ人げ
とこらつ思ひことしつられば兄ひもつゞれて。
りの中をそうしくもちびしうかげゆうくとき
へそひみそうゞりうらうさへぐくさこうく。
二所うらうくへつ帰をとうもおすくく
雪あられ
さう旅よ。ぞうしとくれよなうり。雪霰あり
そく比をいづくとうくこそとしおさ風の音

されど今はじめてむかしきく山姥のくら
し給女ばかりかど。まちしへとさらんと
もとろ仍きくれしきてし我おしくさ
まらべき妻ぞ出てし見とく心とぞることふ
とおもひきつしくれとこそ給。むかひの
山にも除しの法会はよこめり給しゆへこ
そ。ひとと気りりす。八しつおもぶりしもいらぐ
と太くさよまれはをとづれさて侍れど。
ゆふ辺すゆしよつへ日のかきまりくハいと
どへとあのさえもうもきるべきことく
おるうしふしとえしくまん。何とえここさ
ましやまんれしも。かりしまかぐ仍くらふこう

ようしのきさ気ろハめづらしく物おもく給。
此比のことて。薪木乃こひろひてまゐる
山人ととしおりおぶりのゆろよりもちこゑ
どやうの物すりとそてよしばよろくひ侍り
よ乃ろ文めづらへのいまハとそてうえ侍らん
くうころ胸そきさよるんとここてうらかる
うど冬ごもりの山風もきぐうつさわさこさ
ぬるぞつらくしきてをゆかりぞてやるを給。
法しげくしこまらべるぞのおかりり行くとも。
さしこえて法こ。いしゆきかるく我さく
くち出もくことくり給。法ぐらしるぞゆろい
まつくも。さうくさかくゆくしまきめし

ここうこのことひろひて 孟薪菓く 経文かきよ採 薪乃菓蔵らどおり 薪好採とて経不月く
まこと人るとの此おり 帰くもえしてえて法こ 師への法木をなぐさ こゆるくえのふくるさび しさ据く 細 古言義 法ぐしかも 發のおしよもるてを 慕らよむひしよ今 八さうらそれも侍りま

くだくるはかりしひきつれたるとものけりを
あけかくまし〳〵おもはれよろこび
そくともおもひかへすかたしとしてやま
ゆしやはらじとりてひ給
思すくて君のげきらう給しかんしこの
君をとるよろはうら中のこと
おく山の松かぶまつりゆるさるまじきそ
かへんとはりはかりはうしろやましくぞ
まことかりそめや中納言の君ハおもく
しき年ハおとしをえてあらひうてでさ
らんと出けしてかけかり君をいとく
しりきさま[illegible]

奥山の松の[illegible]
まさき[illegible]
るる物しますこころだへのおもてハあく
ぞおもひまゐらせしれたゞ例ならハそれてお
ましますひさうてかりせ給そくぞめる
らね[illegible]のおくるまとかりぞく
ちかうきさもひるひともあるよつけてぞも
[illegible]
人々を[illegible]

ものしうらく

ゑうてそのとハ　大意よ
くしもそくしそのとハ
え返も国しさしふのすへ
程うろうめへき　細　叢の
ふ之人の心ハうろうやもそ
あう物しく　愚案　叢ハ本作
まう道世の心あれど程好文
ひうろづさ抵とお従く
えのりとおやしくうらを
まふ　孟　白根まふやうハ中
其のうけひきあらぬハ
我さりうとおもとえんと
大意まりしうらもし
多うりしれてし

つましくのこゝ地しつれど、ことゞ海なきさ（ことにひろきなく）
やうよ人のおひゐつれハ、いくてうとんとそ（叢の之）
こゝうしく給。うらくとはなけ連ど、さ紀（孟抱こまるうへし）（大意のさ面を叢のおもふ）（二ノ大意叢）
バ、こうハをうしこの望ふづりて、物なるど（の疑切をおひあるく）
ひまくるさ海、いとめやもくこゝろあづうし
げすりうやうふかくのこハえもづへしたろ（細　叢の之）
まづこおひなり給も、いとうらうけなる
うろうれ、程うろうめへきさよなりけるを
おひゐまくう、えのいとおやおく根給くと（細句之）
の待うれ、哀なりしに一つくをとうけさ
まうりとそうしさ海なすど、こゝのつらくは（叢の句）
りやりしゆのしうりうん、又いとく海（細いとあそまのまふうくえ）

細　なう之の叢哀を白人給まひりの程まハ哀て侍らるきし
りうしさうしうらん　師白文へ叢のもうしくこゝやまうん又句の体雅事や
去よりの御うへをうくまりてせぬまふての哀へや給く
まひさく
まそもうづきとてせめ
りそうこなりひ　細　叢乃
つまうれさあよさすき
げかうりやるしの給へ
さしく　孟曰
さとのまうく
墨れ哀ふへハ哀方やでハ
とくし。海の住まのまう
べまわうなくにうらえ
んとのこ人のつかうん
此引おある方まうべ甘で
けとりふ心かゝれど。秧叶
つり　孟曰　花　叢を字給
の案風よ白言の也ふまふ
めしこ
すらさらうことなると　細　心儀
室まめり　細　叢の心れ侶

まさは心のさがなく、どしもうう給しやゆ
らん。哀よなんともうくをまうてさせなると（台の之）
べきとよのむとうれなきは、さしさ給うハ
りそそとなひ出あうぞそし、なくきえんじ（えひく）
給へたゞ、心よりかなるこゝとくおひまつれど
里のまうべいとこよなう、もうえおうづひ
出きしぬ。我何は、いとしさうも、りそなるしめ（細何をそうくれうくハいへのまうぞとく）
え給らん。おひまいるやうよ人ハ、ひきてなるとこ（細白哀の体急をとそう）
べうあれと、心のそこあやまうかゝうおかん
すう文るうかゝ給さらうとなるどの給もとく（孟前之辺）

そぞろに神のごとくにいへども道しれる
人はさらに信もおこさず。音にきくと見る時
とは何事もかはるものなり。かつあらはるゝ
をもかへりみず。口にまかせていひちらすは
やがてうきたる事ときこゆ。又我もまことし
からずはおもひながら。人のいひしまゝに
はなのほどおごめきていふは。その人の

そらごとにはあらず。げにげにしく所々
うちおぼめき。よくしらぬよしして。さりながら
つまづまあはせてかたるそらごとは。おそろしき
事なり。わがため面目あるやうにいはれぬる
そらごとは。人いたくあらがはず。みな人の
興ずるそらごとは。ひとりさもなかりしものをと
いはんもせんなくて。きゝゐたるほどに

みえ世よろづきすぐひがうれば、きむしろすゞろぬとそろハゆりしろつきさしもく
人のみえゆゑ 細 薫ハ句の此心をハ彼くちうもうくゑれうこと 師 くハ句文のこゝとを
こゝにねど薫ハよく見知らうきこし
ふうあり 細 河海の説用
是は娘のあるさこころすゝ
おうくこうし給 師 娘と
さハ物く行うまひて是
ゐゐうんとく
わゑつつしのことくハ 細 姫君
のこと 愚案 此薫の詞ハ皇君
のうすをひて下に八紙大君
へのゐぐとのべたるに大君ハ我
身のうすには心ともつけ逃
て中君のうすに答へるさん
とあはせども
けくしけるに 細 うれ
らひのまめく 薫ハうけ

とゞいひしらずこゝろしらへてしう統りしまつらえ（白文…の中を）
（似合しくさはそさもやるびんと思ひしうづらく）
しく、さりやしめがしうらくぞのりく
すゝるどゝ心の限つくしてつかうまつら（薫のくゞら）
てんし給中こゝちのわづらはしきこと（薫の中ごろのうすとされてその詞く）
そのうへめしいにしへやうやくひつ
けまへハわが此河くちのこと この紛し
をうけぞひとのゆやめさそいへんし
とおがしめぐらし自へどすべてこそこ
とのそもるさんしく、いやよしそ（細 姫君の詞）
うけくしげよの給河ぐらよせらくさし

師 いふゆへしらハしとえ候と
やうんとひふとかく
ならバ此ゆくうら
並中君のうすをこえ中せ
此勇をうけて作くるて
おくまの大君へ給やく
師 案ハ大君の指摘ので
よく薫の心ハ大君に心
うけさら詞ども見れども
見いひのいふら詞く極を
深さ我心ともの事にく
みくれハ雪をかこまけく
細 薫勇のうくとそう
師 それハとハ所まづらの
うへに我心ざしあるす
そうく雪をかこまろ
勇づりを給らんしさ
けくことさせまへて見え
我中ハ中君のうすく所勇
のうへハ只へく雪ふらく
まうりさうらへばうるよ
こゝしをさせるへてわさ
こゝやうよいひすてかう
きゝるを語しする詞し

えんこゝも思しゆるでとぞうちはくひ
あへるもおひとうちりのうくげそそひ
おりたうこそ細。香にもづうしさうし給へ（細 薫の詞）
しおがべきことをさひまへぞそれハ雪
とやうて、あらかさうこゝろつぶしぞ
うりと此らんじまうむ。れにこれくこてろ
こまくもとぐさせまひてのさしの方にて（細 中君の事をいへる詞）（の此心うけのうへハ中君とし）
ろりせハおくさことよぞうらべりう。詞の
うるの語さ西もちくめうしとゞいひさや
それも人のわさけしげてさつしるすり。
此道るをはいづくよりハこうて語ことひ
中語よ、よくうそしそこうれみとさうし

このうちに 孟 ちかきハ中君のあのうちにすまひせハ法ら別かれとぞうり
ものなり 細 白文中文よ書傳ありてしるさし）孟曰 師 白文の書傳ありてとうさり
あしこ薫の宮かく 師 みちどのあらしとこそ給
いさやそれも 細 いづまつりいづれとハ人の定かさまく
給しら姉君の時君のいづれの流を人とハくえがてさしと
何を思ふにハいづくにまよふハ 細 薫の向ふかく 孟 匂宮への心をもしハ誰かきこしまひそそと
薫の大君に親しく
よくそこちかれなき
とふと大君の心く

言あるき 細 君あらでとハ
薫の方へべらの御返り
みあとし 孟 大君方之君
なきでとハ薫へかうこ
てありそもとく
ききそさし出 晄 初よ出
がらくてうきてさしてど
まつし 孟曰 細 上白ハ報カン
つらとら
難カンなりたれどえしそさ
そくかぶ白ハ白文よりも

ぐらく何と思ふかとハ
人よ返しとぞえり告
其籍義の方く 師 山
里の様と後まで君
さの心ハ故労のりを
おのかくてしまやま
まししハ其の心く
けれとも 細 ありのぞく
あらてあまくハ且ハざうと
く閣書山らげんこ由あ
あみれあさきんハらづ
おりくあすくよ
おりしれよ物ありあるも
細 大君の心く 孟 何とや
らんなまくちく如く
道義つしめうちく
けらくうよ 細 薫の心く
大君のあり御をとこの
おしくとうかし

細
うしろぞと姫君のさうし 孟 ちくぞ中君よりてせ月
らハ薫のく同字かも初しらん見えし
ざりけり。何となくれどうの給ふもいとふ大君よりて有をかめ
いらまちづりうしねつれなしと思ふ
よえこくやまず給はず
大君
言ふりさ山のけしき君すそしみかき
薫の詞し白ハ文もうちぬと大君のことのあまを
つらみ給ひとそぬれとこそさし出ありれど
はりのわびしく中くこうさきつれ給
薫
まめくかれとぞ
つしきらがく御のことかくし山河とききらく
孟しもハ見えず
しのびてこそはまうでんさうしげしきに
かげさへとあるしもあきらへ給ふらじ
ともすくまへてどのしとをずまよ物しう
あるりてこよはいくへ給ひ侍けんやう
まいとも物ども袖くもくこそるさ御かほこえし
孟 けハ付字く靴之 師 靴氣ハ靴あり氣あるし
給ふるといかやうのけうへべらのや
うらえんげおもしりてうそぞうしめやす
のじうあうらなくすくんとぞ。とうくう
薫の物くよりかひて見ひまる
れ給ひへのはげしくひるう。うらてそハおう御
よ蓬ねる大君のふ御とく
おしくれどもよまづくぬくわらし給て
とよかれて氣色たらくまうも。思ひはべ
大君の心
薫心く
なうき御よのこりそうしまへつべく。んとなり

ちうて。昔物語などとぞそりのすゝめやうよ
ゆのゝ給。られてそ花いひさいとぐ究しすゝち
めべう侍りし。ぬとりとのんぐこそいられ
だ。なり給ふまんとて。ふぐうりうるのめん
らくるしけれど年まるのさ雨るりや。らぐ山
里のやうまいとさぐうなる所のへんをとゆ
きまじらね所まで侍るとぞさまと見りしう
けはひはまうしく侍らんなどの給も。
いとめでたくさうべくさしらるれどさこえ
まさてこうらぬむ女っつものおわ給はなうの
まへいてさとぐるしうい給ふまそゆけ
ちくべきてしさくしめまくり。はらくこりの

細 中の君のことも見ゆ
孟 雲閑るみ日
文選雲合ミて雪の積るよ侘ぶり
薫の事、姫君など
細 薫の詞也。かゝる北方にあるべしとにてくそとへ
薫の御詞
のまへつるまるまとのかり
孟 大君の御詞也。なすべく
突

をしめりさ雨のくまうり。れとともれへく
めとされるじめやもすことうそかゝり
けさしもさせ給ふり。この御れうつりうとも
てさはがまて夜おんぞうづつひげと
のおつゝきんつきるくてわるまそう
なのれよめりじんやとまきてめて山
より。いのよぞおりしまさで後の御を
てしんるべくさひ給。打ひそそつゞく
ろまそげよるく。世中はよのむよ
あへをも侍らぬ身なく。一とゝろの御わが
よこられて。我よ御んとゝう侍らくの、これ
はいまはまして此山よまづるさ侍るん

細 古宮の御後
孟 宇治の姫君を(?)薫のまへ(?)
孫姫君よ薫の衣とかけたり
薫の心
細 このゐる人の御
ゐる人うき事也
細 是ハ宇治にてもつきゝみく

いとめでたくさうべくさこそとて女房
めひとらんとのまゝとて女房
さハ枝のく。弟よ山細く也
しきるとおひろくさ君ね
出てくるをいとけさず
ひしらくまの無也り
中の君ん 細 中君ノ事

さハおつまじきこと
あげそく。師 文父の遺言
を中君の也。又ハ花。女房の
君くつ方に君まへハ中君
弟の姉君のいとも
て中君のこともおりがた地
ろすとも。ひあふくえく
くてひけ 細
らひげなどくん 河 髭 鬘
髭 鬘 頭 せもつくひげく
ろぐとうけとやうる
あへらく

いつろ春のりしてらへるのむべし　元古今　滝人の云
ことも立しる春の中へたのむかけるくおもちりそうり
紙のことぞ　細　のとハ雪也
ならば我を了簡也
孟　花のかぎりハ瑞るるじのことく又花盛なり
とるるひとひとりと
お宗の汚ひもりしとある本あどよりをりりし
おいとも　細　ハ蒸の如きも
おつらて了る結とせ
とく　巽　ハ蒸の又ま我出家もしまりて発し
とそび出すべく　細　花六帖にハ
春のあけり　そくぐさるすの山の雅
ふげおみそだくしと　師　雅の
こありはかくなくさ　夜は

をいつる春の中にかへりのむべく待らん　三条の院にも読へし
とよそいふくへまろげすゝなつ　細　さ宗のきしく重ね
くさすかせさまくれバらりつゝ
て結しけのみぞくれのかぎり
ぞどこるひ結くりしとあされゆらみぞく　宗の山家之
とりやつまくさちくひさりて消いとを
しげらとくらざるそこしとしへ
出くく
蒸　さらおんびこのそ
しき厳よりよきうれどそくらち　雅だ即む
よまりぬまゝるとことへこ　いのそ
さそれめぐりすり　日暮あれバ

おとゝいひり出家まりと
そにそみてあひ細を
ひましさ厳と言うけ
るうちくく餘情とそ色
ねそうるるてつまつ
ぬ法ハ初の我すりあつうお
まさの人くるぬ法ハ次の人
ぬ緑よりたりしくるは
ひのくに法進家の給ミの
给の了る宗の家をえ兆
君とまろをかねぬ法ハ継ぎ
とりまやうしハぬ法ハ次の人
このもつて蒸ハ是る
つぬしとし
あまびさりくへ
なのへて是ハ法立と　彼出
そわよ言うしるこ
おやさるりしるるさかざ
うる　蒸のもて法果ひり
てかくせしなくそのく
まりうるとひしるとき
まらそうる事の人ぬすなく
おりへてまりすりましく
細宗家へつくうりの也

うどそうつよゝさうるみどしつまりる
へぐよきまくきとりよやるまかうさき
みぬさちり結そぬよるおひさろんてく　緑ゐとしてすれ
出すもつくるくひさりれまろうる結ぶ
おやちつりしつるさまくべられとおえ
ぞれとおいべへよますらつ結州なさ　細孟有説
るやうよつくつまりつるくゆかとみて　君も変らすよつらみまれし御所の人する御事て
出結ぬとしりうりあれべそうしのその此う　細　蒸抄に歌之　守治の家の気とく
らりおなるよけの氷ともさるまつけ
てとうりまてなりしくへろうもすぶくとを
とあるあ結びまりのぞらうよう宣てよ
つそそ結うおすりとそさりのをりらく也　芸

花家やうよ物かひなぶんとあかとく 師 細川殿ハ御庭の人の手わざも見る身あらハ
作付られし姫君へハいかゞなれど手よ作せまちまてつかてつかうまかく昇殿
ハ御庭の人乃うら御意ハ至く急ぐまうと是よしるかしとてさ人よ御目見えと許され
らうしまかとく
汁の出かとけまうよ 細 姫君の心れとけざうらうりく哉りつり 呼盃曰 師 姫君乃
盤よ御心もむせびれきうよ汁の出ハしけまうよつけてあしとく
あらじとも 細 今こととさがさき世まうぐ出でさけうらうし飲しうう之 師 姫君
是の御心ハ見るよ ぞられてハうき何もあらし出づ出目さゞ見うよかとけて是あ
出まずてきうき命もうずく行うかるのと出がしめぞとし
是さぶえよ 花 客ざくよ御へ出れつハうし是日の限へよわる出つ 中参集

蔵人すぐまかうらぶりぬの御盤よまれ
尚にまつけていろう芳の手れ今しまうよ志
まひても月日の是うしとしそ
かうしられすじんぐのいふを何の
なうんと出す絡
是が出多 紫の手うしびとまうへし
られやせまうしうろの是うしも

是が出う
八文の是世まてさうてまよ 細 太夫の奇く
やぞ絡つうしびつまかひわ
らまりとし 師 彼人その
伺よ是うろ奇し 是乃
まうし紫の芳蔵ろうば是の

かもれぐしまじ出う
てもかつせまうしうぞと
うつまぞひかくとべし
香かうさ 細 中将の奇く
若身のあうれまよまうき
めまつきそやもべき事
もうすき身まく 盃 是そ
あやうくとろ山の飯まう
つそをうでび人あうられ
おやうし 師 出やうよ
しそといえんとあるこ井
まよめうつくうそやさん
とハ摘りそそやそてつき
なしく井ども飲まこ
そまつくとべうれ孩く
泪とめまつくりてさやを
づさ文をしまうしゆまうね
つくしさそて下よハ細殿
のふもこりつまや
花盗のれくぶしと出がし
細 去年の是まの人個し
くぶしとれてぐゝるれ
まうつ時のすえく
いてゆりしく出ぢされ冬り

中
香かうさみざきハのことをり飛ぼしまつと
うそやさん出やすかしておずぞうなさ
ことどうらうきらひ彼らあげつし絡
細 中将の下芳うそ付し
中納言蔵うりとも文よりとあり
ぞとあうしひ出まさ絡うろそうるを白
しし出れうちやうまうれバ生いのうさうし
まううかり花盗の比文うぐしと出が出
白文の伺供よまうしく
てさかりと出絡しまくちうるすごとんて
ゆへかりしよとの情をとまうろまえ
ぞまうかつしとあうじ出月うとのあられ
とくうくきてむるよ いつとゆりまう
出ぢされさうり

今ハおもふくの哀をぞ
これ白家ハ姉君の事
ゆりうけがましく
はてるよし　細 白の事なり
姉君の中君への詞也
年のまへにしそおもう
え一と云君ハ霞へだて
だつ宿梅よ中君とぞ見え
やもおもり 作つそれより
八橋にてかうかうし
又家あり 細 たびくんハ
ろけまでし北の方の様に
きかうりみえし
めづとろ 細 霞の内ハ花
そんじろのぞきよし服
君の上とばいつかりて
んしてふく 孟 霞乃
ちとすしぞめしとそう。
服君の宿あれど 師霞
つぞもおりてと白家
のまことにおりよりて
墨染よ霞とめづつ宿
されバいづくらぬておほり

孟 白の中君への詞
はかなくかくし宿の桜とこの春ハ霞へだて
てぞわたりゆくにも。ともかくやつらくの給へ
姉君へのこゝろ
ましかりけり。かつまじくこそおもひ給ひける。
ゆうつれくるうゆうよ。霞わるかうその
物思しき声をそなへ
うへわりとりてけしきして
孟 中君の詞
いづくうる鶯て世ハ人墨染よ霞こし
めさる宿の桜とおぼしうそうらく。
細 白の心
つれなさは氣色のこゆれハかへしまう
孟 薫と白のかよしまで
ろうし世かりしもろ。はらふよわまうあそ
ハうじ中納言と。とり雨よとも根
薫の心
姉君の返歌よおりてそし
きこしすへかりしも、ひるうしらべうけ
わりかうかしかれまいひらいへなきうし

おさめのうちはなれて
細 白のおもくしきこと
の見とかるみけく薫のか
くつましめうまつく
いうくくらんよハ
孟 ゆうよおもくしく
ハ誰かるびさきなんと
薫の白へ申し 作りて
なうよおもくゑうはん
よハなうぞうも住まる
べしと
やよりおわりと 細 白
の返答くさして云ての
にハざうるのらすし作ん
さらにそ人あさ宿よこそ
さくまくわどめくぞとえ。
いう細るどの心よけふ人を
宣さうバうくハわうじの
うろく
大殿の六の君を 細 夕霧
の六乃君を白さるみと
おしことなり
ゆうりけるすこるうしひ
六の君ハ白家の伯母うた

ておさめのうちはうろさ雨をとこえわかくく
を時ぞとハいぞのかつらんよりてろみじかき絶
孟 白の詞
へハ宮すも涙うつろひし絶べしくらよる
ふおもひをまさうるつぬ涙もやくの絶。
世れハ霞の六乃君綫世かくしられぬこしぞ雨
白の心
うちのしげるよ世のまを見し出る名か。
白の心
されどゆうしげるさるうしひたりける
と。世とぐのことくえてもぞつうくして
三ヶ月のゆうかくのまうんと白家のおつしく宮をそなへ
うまよとなきざれとをしゑとよもあられん
北の方の心
がむつしふしきくさまいのまて世まお絶。
孟 女三宮
その年三条のゑやつかく入たつ家も六条院
よう川ろひまひ何くれとりのさはぎし

つゝそでゝとゝまりそでましまし
ませバく
まあやうすう人の
細葉のとしあまつるよ
四のどあくらんでそ大
君をも板らずしまく
かく師匠ゑゝ對し
てまる徊く
ひうしの流ころ　姫ぎの
ふくハさそのもえせぞ呂
八重の流れさまにしてを
葉ゑぎれぬりことを姫君
まえうまえとおり
てまうがおわり来る

お葉の守治へ涂をうろく

きよまぐされて守治のとうりと久さう
萬づれ苦しまつぞまめやうなる人乃
流ころハまさいとこと有りされバ此の
どうよぞのが抱とへらうゝのとるがく
女の心ゆうび給ゑざきん限(くぎり)ハおきれぞ
と情(みさけ)ありさ海よとしじとせひつて昔
の流ころまされぬうさとゆうくらしてま
久と思ひとぞそのとしつねしらもあつさ
（八重久それあひての此乃年の夜のことく）
と人ぐふうまうはつてもそくしううん
りやと苦おでよりよまうでまうり網をて
（細葉く）
ずとの間よよ出まひされバおやかくま
ましうう月けもまへゆして妻のゆうせし

あのひさしよ　初日の
さうくゆへよあのひさ
しよ　おさらくし
そまされりやの仏の内へ
よ　二　妻のおくをし方
まれへ汁母あ仏前る返

つとまさまりり　細葉さ
いくよまりうるまて
よくえんとき給く
末丁をそへてそうう
ル振を涙立てうる一語
ル振ぞそ海てうるく
おさうしのあすこの
穴どをうよ末丁のあさ
るく

あのひさしよ度ある人かり出て　かつらどなる
さのりや仏の内まんよえぐうら抱し
給ふうとけちらかじとそ我れるさよ
まくり給れけとひしのびされど妻の
（姫君庭の……）
つらうらえごろうさ給得ちうくさうく
（葉の心…）
それバおす紙あくじよこるすこまうふさ
うじのうしめうさよかけて乙ちてる所まま
あるのもとしあきうう紙ととこさ寄人
（みよく袋障子の…）
まされバとよしてうう屏風を引や
まてさ給こてありよ末丁とそへさそく
（細葉の…）
うるあるはおしと思ひてひさゝくつあり
ゑとも風のそゞれとりうう吹あくべかあれ

ここの御末丁とし知るそ
弁済子のあるとよめき
てさる末丁とも見れみ
ことをしせさるく

めるくさよととらん
細 姫君さらのあるく
よ入ろあらんともるを
みすあて

ば（何の女房さるの御く）いかなりともこそあれその御末丁なり
し出くこそといふ人あまり。おこのあ（葉のこく）
きりのくられしらて三絡へいさらんこもとこ（其保辛ろ九様と出てみ元ならうくるゆくるすり）
げつくさも本懐とみてまのともとしよ
をてこれさらじよむかひておさうるさ
うじようあるくよとどらんとひりあ
さえひとり立出て末丁わきしれぞ（細中君く）
ささ此流ともの人でのどうりもちびひ
そぞきあへるとこ絡るりくり。こさこふびき（何濃淡色差服く）
のひとくよくそしざうのをとかのりてそ（何黄茶色黄でこうら色服まえく）
やしう。中くさ海りつりて。ならやうるり
とこゆりいさきしまつりんへぐしるぬんり。

あひくりすげよ　細うけ出ー
く兜　け帯のくるし抱ま
うてあきよ女のくるか帯
くみえ帯とりよかくらこゐ
ののかさごと帯とりへそ
りや。みえひさごしとりら
さあよそひらねく小腰
かさらしくてあらく

女一家　細 今上の文の石中
文の御服く業われのくよ
えさそまんりしこしとあ
るべし　御 今上の女一家
の御ゝとえ　宮生の意に
も業の又絡しこしおろ
よわくりよかりしるは之
なりしまてれ。わりあり。
あれバ女一家のこくりよ
むりしすりうととさとる
のるんむかし　ガ今ハ此中

あびきうちすげよあるるりしてむしひさり（珠数）
くきそすぬでりいとそびやうよ。楊柳お（せいようらく）
うげるりんの。くこうちさるよらこし
こしぬ絡るらんとえして来まぞちらの
ますひすくつやくとこうちこうらう川
くげなりくさとちくしめるとあるら
うきげとえして。白ひやうよややうちりよ
此月どうさうけるひ。女一家もううざ（其此やうるの之）
海すぞおもすべきし。用のこをありしも
思らくられてくらるげりかすこねざ（細 人意之用之余）
つと出く。誰さうじ。いあらはみもこそ
あれとことどこうせまつく用ごさうと

君のやうにはそおはしましさぬひとくべきことにて見えひらくべきみちなんべくや
ちらされけり 師 薫の心をとゞめけるよし 姉妹なれバ中君よりもひときハすぐれたるにや
てもうちすげなきを

いはずとも見るべき也 細 薫のよそより見る也 孟 薫ハのぞき見給ひて今の事也
大君の事をかたりのべたる也
いかにもあるべきことをいひしらせたる也
いとさまかはりたるよし也

孟 純 黒の衣也
薫の大君をさしひたまふ也

けうゐあしくよしあらんとおぼゆる。かしらつきかんざしの程。いますこしあてになまめかしきさまなり。あなたに屏風もそへてたてゝ侍りつ。いそぎてしも。のぞき給はじと。わかき人〻なに心なくいふあり。いみじうもあるべきわざかなとて。うしろめたげにゐざりいり給ほど。けたかう心にくきけはひそひて見ゆ。くろきあはせ一かさね。おなじやうなる色あひをきたまへれど。これはなつかしうなまめきて。あはれげに心ぐるしうおぼ

かみさはらかなる
細 髪のすこしおちたるを 孟 髪乃
さはらかにてうるはしく
いろなりとかいふ
細 色ありといふ也
このこゝろはかねといひ
つやある(?)といふ也
花 翡翠ハ鳥名 赤羽曰翡 青羽曰翠 今案翡翠ハ髪ノ
色をいひ
ひといふ鳥之異名
暁 翡翠ハうるはしき
いのちあるかたち下略
むらさき
紫色ニ書タル経ハ法華経也
孟 服にも通用紙の
色にも用ゐる也

ゆ。かみさはらかなる程におちたるなるべし。末すこし細りて。いろなりとかいふめる。ひすいだちていとおかしげに。いとをよりかけたるやうなり。紫のかみにかきたる経をかた手にもち給へる手つき。かれよりもほそさまさりて。やせ〳〵なるべし。たちたりつる君もさうじ口にゐて。何ごとにかあらん。こなたを見をこせてわらひたる。いとあいぎやうづきたり

孟 中よりも大君ハやせてさやうに見ゆる
細 中君也
大君のこゝろなるべし
なにごと